

楽器の教え方

2012/10/27 大阪定例会

藤坂龍司

はじめに

<教える時期>

だいたい4歳以降。本来は年長さんからでもよいと思うが、幼稚園で楽器の演奏があるところも多いので、その場合は早めに教えることになるだろう。

<わが家の場合>

4歳の時、木琴を教え始めた。途中からおもちゃのピアノに変更。幼稚園卒園までに簡単な曲をいくつか弾き分けられるようになった。ただしまだ人差し指だけで弾いていた。

小学校に入ると、音楽で鍵盤ハーモニカがあり、5本指で弾かなければいけない。そこで5本指の弾き方を教えてみると意外と簡単にできた。

そこで初めて「この子は音楽に向いているかもしれない」と思い、2年生からヤマハ（スガナミ）の音楽教室に通わせることにした（ピアノ個人レッスン）。同時にピアノを購入。家で毎日練習するようになった。すると両手での演奏もできるようになってきた。ただし音の強弱を弾き分けられるようになったのはだいぶ後のこと。

3年生からリコーダーも教え始めた。こちらはそれほど上手ではないが、学校の音楽のテストに合格するくらいには吹けるように。音楽会でもリコーダーを務める。6年生の最後の音楽会ではキーボードを担当した。

教えるのは主に私だが、家内も教えた。

中学に入ってもピアノを続け、現在（高等部2年）に至る。発表会に出るほど上手ではないが、一応バイエルの中級程度が弾ける。ただし指は今でも不器用で、あまり速い曲は弾けない。微妙な強弱や、イメージを弾き分けることもできない。しかし本人はピアノが好きで、家庭でのピアノレッスンを楽しみにしている。

<歌と音程>

楽器を教える前に、いくつかの歌が歌えるようになっていることが望ましい。

しかもその歌がだいたい音程が合っていることが必要だ。歌は歌えるけれど、平板でメロディになっていない、という場合には、楽器を使って音程を教えよう。

楽器はおもちゃのピアノ、キーボード、木琴などがいいだろう。

まず低いドを聞かせて、それに合わせてあなたが「ドー」という。子どもにまねさせる。次に高いドを弾いて、あなたがそれに合わせて「ドー」（傍点は高い音を表すことにする）と言い、子どもにまねさせる。つまりここでは楽器の音を直接まねさせるのではなく、楽器はあくまであなたの声を正しい音階に合わせるためにある。子どもにはあくまであなたの声をまねさせる。

最初は音の高さの違いが大きい方がよいから、「ドードー」と1オクターブ離す。子どもは正確にまねできなくても、とにかく後の音を前の音より高く言えたらよい。

上手になったら、徐々に近い音を模倣させる。例えば「ドーソードー」「ドーミーソードー」など。こうして、大きな違いから徐々に細かな違いへと、弁別のエッジを鋭くしていく。いきなり「ドレミ」を教えるはいけない。

右上がりにある程度慣れてから、右下がりの旋律も教える。「ソーミードー」など。また「ドーソードー」「ドーミーレー」「ソーミーソー」など、中上がりや中下がりの旋律も教える。

ドレミだけでなく、いろいろな音で、音程が取れるように。例えば「ドードー」の旋律で、「あーあー」と言い、音程をまねさせる。

上手になったら、簡単な曲を、正しい音程で歌うことを教える。ただし完全に正しい音程でなくても楽器は教えられるので、苦手な場合はほどほどに。

1. 簡単な曲を弾く

テーブルの上におけるサイズの、幼児用の木琴、ピアノ、またはキーボードを用意する。ここではキーボードとしよう。教える位置は子どもの横。

とりあえず低いドからソまで、鍵盤に色違いのまるいシールを貼り、シールの上に「ど、れ、み、ふぁ、そ」と書く。色は似た色が隣り合わせにならないように、配列に気をつける。例えばドから順に、赤、白、緑、黄、青としよう。最初から全部貼るのではなく、「ド」を教え始めるときは、「ド」にだけシールを貼っておくとよい。

(1) 単音を弾く

「ド」と言いながら、低いドを人差し指で押して見せ、子どもにまねさせる。押すところを間違えたら、もう一度やって見せ、プロンプトして正解させ、強化する。プロンプトフェーディング。

次は「ソ」。これもプロンプトとフェーディングで。上手になったら、「ド」と「ソ」のランダムローテーションをする。

ただし、ここではまだ「ド・ソ」や「ソ・ド」のように連続では弾かせない。あくまで一試行に一音だけ。いわば音声模倣における単音模倣、動作模倣における一つの身振りの模倣のようなもの。連続で弾かせるのは音節模倣や連続動作模倣、二つの物を取る訓練のようなものだから、子どもにとっては難しいのである。

「ド」と「ソ」が確実に弾き分けられるになったら、「ミ」を教える。

これまでは大人が弾いて見せて子どもにまねさせたが、この頃からそろそろ、ことばの指示だけで「ド」と言ったらド、「ソ」と言ったらソを弾けるようにしておく。また「ド」を弾いて見せて、「これ何？」と聞き、「ド」と言わせる。つまり「ド」「ミ」「ソ」を動作模倣、音声指示、表出的命名の三面で確実にする。

ドミソができれば、さらに「レ」「ファ」も加え、ドからソまでを模倣で正確に弾けるようにしよう。

(2) 音節を弾く

一音ずつ弾けるようになったら、音節で。まず二音節から。「ド、ソ」と言いながら弾いて見せ、まねさせる。次は「ド、ミ」。次いで「ド、ファ」「ミ、ソ」など。まずは低い音から高い音へ。少し慣れてから、逆に高い音から低い音へも練習する。「ソ、ド」「ミ、ド」など。

二音が上手になったら、三音。「ド、ミ、ソ」「ド、ミ、ド」「ソ、ミ、ド」「ミ、レ、ド」「ミ、ソ、ド」など。

このあたりで「ラ」のシールも追加して、ド～ラで、5音節まで練習する。「ド、ミ、ソ、ミ、ド」「ド、ファ、ラ、ファ、ド」「ミミレド」など。

(3) 一曲目を弾く

最初の曲は「チューリップ」。「ドレミ、ドレミ、ソミレドレミレ、ドレミ、ドレミ、ソミレドレミド、ソソミソララソ、ミミレド」とド～ラまでの少ない音階で構成され、テンポも一定で、教えやすいか

ら。例えば「かえるの歌」は後半の「ケケケケケケケ」の部分で急に速くなり、望ましくない。

あらかじめ、「チューリップ」を「さいた、さいた」で歌えるようにしておく。次にドレミの音階でも歌えるようにしておくといよい。「ドレミ、ドレミ、うたって」と言ったら、最後まで歌えるようにしておく。

教え方はバックチェイニングで。まず最後の「ド」だけ弾かせる。次は「レド」。その次は「ミミレド」。それぞれまず音を言ってやり、弾いて見せ、もう一度音を言って弾かせる。次は「ララソ」を弾かせ、上手になったら、「ララソ、ミミレド」を弾かせる。次は「ソソミソ」を弾かせ、上手になったら「ソソミソララソ」を練習する。上手になったら、「ソソミソララソ、ミミレド」を弾かせる。

次は「ソミレドレミド」。次は「ドレミ、ドレミ」。次は「ドレミ、ドレミ、ソミレドレミド」。次いで「ドレミ、ドレミ、ソミレドレミド、ソソミソララソ、ミミレド」とつなげる。

次は「ソミレドレミレ」。次は「ドレミ、ドレミ」。次は「ドレミ、ドレミ、ソミレドレミレ」。ここは「ソミレドレミド」と間違えやすいので、子どもが「ソミレドレミ」まで弾いたらすかさず「レ」と言ってやり、プロンプトすること。

次は「ドレミ、ドレミ、ソミレドレミレ、ドレミ、ドレミ、ソミレドレミド」。ここも前半は「レ」で終わり、後半は「ド」で終わるところが間違えやすいので、それぞれプロンプトすること。

上手になったら、その後に「ソソミソララソ、ミミレド」と続けさせ、全体を完成させる。

(4) 二曲目を弾く

二曲目は「ちょうちょ」。「チューリップ」と同じく、少ない音階で構成され、かつテンポが一定で急に速くなる部分がないのがよい。教え方は一曲目と同じ要領で。

<最初の二曲を弁別させる>

最初の二曲を教えたら、直ちにその二曲の弁別、つまり弾き分けを教える。まだ曲の題名を教える必要はない。「ドレミ、ドレミ、弾いて」と言ったら「チューリップ」を。「ソミミ、ファレレ、弾いて」と言ったら「ちょうちょ」を、最後まで混同せずに弾けるようにする。最初は混同しがちだから、要所で音階を言ってやり、プロンプトする。プロンプトは徐々にフェーディングする。

(5) 三曲目以降

これまではド～ラまでしか教えていなかったが、ここでシ、ドのシールを追加し、低いドから高いドまで弾けるようにしておく。ただし低いドと高いドを弾き分ける必要は今のところない。「ド」と言ったらこれまでどおり低いドを優先的に弾かせるようにする。「ド、ミ、ソ、ド」などの短いメロディーを弾かせる時に、最初に弾いて見せることで、最後のドを高い方のドにさせる。

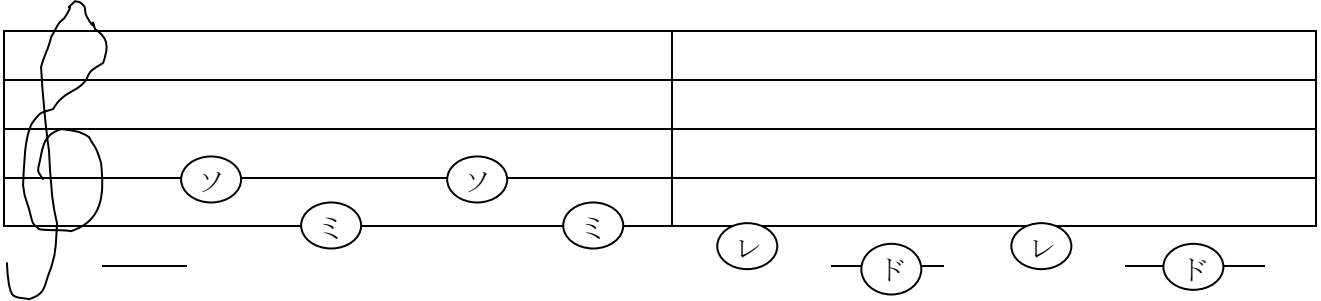
三曲目以降もできるだけ短くて、ド～ドまでで収まり、しかもテンポが比較的一定のものを選ぶ。「このぼり」「のぼら」など。とりあえず5, 6曲弾き分けられるようになっておけばよいだろう。それ以上は楽譜を読めるようになってから教える。

この頃になると、「ちょうちょ、弾いて」などと曲の題名を言えば、弾けるようにしておく。最初は「ちょうちょ、弾いて。ソミミ、ファレレだよ」などとプロンプトするとよい。

2. 楽譜の読み方を教える

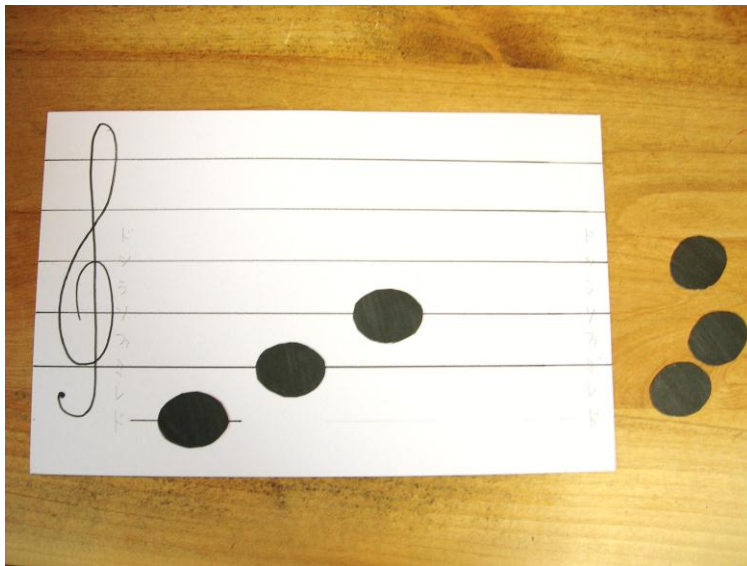
楽譜を参照しながら弾くことを教える。

最初は音符に「ド、レ、ミ…」と文字で書いたものを使って、それを目で見ながらゆっくり弾くことを教えよう。



次に図のような手製の五線譜を作って、音符の位置から音階を読み取る練習をする。

最初は音符を1つ置いて音階を言わせる。鉛筆で薄く「ドレミファ」を書いておき、それをヒントにする。逆に音階を言って、音符を正しい位置に置かせる。「ドレミファ」は歯が抜けるように部分的に消して行き、最後には位置だけで音階が言えるようにする。



1音が上手になったら短い旋律をオタマジャクシから読みとって弾く練習をする。例えば図のように「ド、ミ、ソ」の位置に音符を置き、それを読ませる。もう一度鉛筆で「ドレミファ」を書いておいて参照させるとよいだろう。読めたら弾かせる。

2音～3音のいろんな旋律を提示して、音符の通りに読み、弾く練習を数多く行なうこと。子どもはすぐに思い込みで弾いてしまうから。3音が上手になったら、5音まで増やす。

手製の楽譜で5音程度の短い旋律を弾けるようになったら、本物の楽譜（と言っても子ども用のもの）に移行する。

音符の拍数を教える。♪はタン、♪はタ、と教える。二分音符はタンタン。小学校に入ったら、四分音符、八部音符などの名称も教えるとよい。

3. その後の教え方

(1) 5本指で弾く

とりあえずド～ソを5本指で弾くことを教える。鍵盤にド～ソまで別の色のシールを貼り、ついでに子どもの指にも同じ色のシールを貼るとよい。最初はその色を目じるしに、「ド」を弾くときは親指、などと理解させる。

慣れてきたら、親指が「一の指」、人差し指が「二の指」・・・小指が「五の指」と教える。このときもシールに番号を書くとよい。

<くぐり指>

ド～ソを5本指で弾けるようになったら、今度はくぐり指を教えて、ド～ドまで5本指でなめらかに弾けるようにしよう。くぐり指を教えるときは、「ドレミ」のあと、親指を下にくぐらせて、ファを弾かせる。ゆっくりミまで弾かせた後、子どもの手を持って親指をファの位置に持っていく。と同時に薬指が下りてこないように指で軽く妨害する。最初は「ドレミファ」だけ。次は「ドレミファソ」。最後に「ドレミファソラシド」。

ドシラソファミレドと下がるときの「またぎ指」も同じように教える。

(2) 両手で弾く

最初は各小節ごとに左手の音が一音だけ。しかもどれも同じ音のものを選ぼう。次は単調な二音の繰り返し。たいていの子供向けのピアノの本はそのようにスモールステップになっているが、必要ならそれをさらに細分化して、失敗させず、徐々に慣れさせるようにしよう。

(3) リコーダーを教える

最初はソラシドから（片手だけで吹けるから）。上手になったらドレミファも教える。

<穴のふさぎ方>

穴を指で完全にふさぐのが難しい。指の腹で穴をふさぐには、指の先端が穴をやや行き過ぎるくらいがよいのだが、子どもは皆、指の先で穴をふさごうとするので、うまくふさげない。低音部分は特に難しい。最初が肝心なので、そっと子どもの指を持ち、爪の先を、穴から1センチくらい先に誘導してやること。徐々にプロンプトフェーディング。いい音がでなくてもほめる。いい音が出たら余計にほめる。

<低音を出す>

いくら完璧に穴をふさいでも、息を強く吹くと低い音は出ない。あごを下げて口をふくらませながら「フー」ではなく、弱く「ホー」という感じに吹くのがコツ。「こうしてごらん」と言ってあごを下げさせよう。笛をはずして、「フー」と「ホー」の息の出し方を練習させてもよいだろう。

<曲を吹く>

一音ずつゆっくり吹くときれいに吹けても、曲を吹かせるとどうしても息が強くなったり、穴がうまくふさげていなかったりして、甲高い音が出てしまうもの。これを完璧になくそうとすると、いつまで経ってもうまく行かなくて、子どもは笛が嫌いになる。ピーと音が外れてもにこにこして、「よかったよ」「じょうずだ」とほめてあげよう。そうやって「音が多少外れても気にしない」という姿勢を育てる。それが逆に上手になるコツである。

(4) ピアノを教えるにあたって気をつけていること

娘はこだわりが強いので、ダメ出しをするとそこが直るまで何度でも弾こうとする。そうするとますます間違えてしまい、最後に泣きだしてしまう。

そういう経験を何度か繰り返してから、ダメ出しは極力控えることにした。

- ・ミスしたときに、声を出す、身体を動かすなどの反応を一切しない。
- ・最後まで弾いたら、途中でどんなに間違っても、「よかったよ」とほめる。
- ・その上で、うまくいかなかった部分を取り出して、

- ①もう一度弾かせる
- ②もっとゆっくり弾かせる
- ③音符を読ませる
- ④手拍子でリズムをとらせる

などして、成功の確率を高める。少し上手になったら思い切りほめる。上手にならなくてもほめる。

- ・なかなか上手にならない部分は、「ここはまだ無理なんだな」とあきらめて、それ以上要求しない。
- ・子どもの現時点での能力を見極めて、無理な要求をしない。
- ・発表会などで難しい課題曲を出されても、それを完璧に仕上げようと無理をしない。無理をするとあとで「もういやだ」となり、ピアノ自体が長続きしない。
- ・うまくできなくても、一切叱らない。不機嫌にならない。責めない。イライラしない。いつも安定した気分を装い、穏やかな春の日差しのようなレッスンをすること。
- ・短い休憩をふんだんにとる。同じところをあまり何度も練習させない。だいたい5分に一回は休憩する。
- ・いい所でその日のレッスンを終わる。あらかじめ終わる時間を決めずに、切りのいい所で、最後に熱を入れてほめて、さっと終わること。
- ・本人が納得がいかに、もう一度、と要求しても原則として許さないこと。許すと完璧こだわりに火をつけてしまう。
- ・どこからどこまでを弾くか、何度弾くかは大人が決める。子どもに決めさせない。主導権はこちらが握ること。「もういい」というのにもう一回弾こうとしたらやめさせる。